がらっぱ伝説

日本には多くの「妖怪伝説」があって、川を有する地域では、さまざまなカッパの伝説が語り継がれています。

本市にも九州三大河川の一つである川内川が流れていて、他の地域と同様に川内でも語り継がれてきた伝説があるみたい。

昔から、がらっぱってどんな妖怪として言い伝えられてきたんだろう。

「川内市文化財要覧」の中からその伝説をいくつか抜粋してみました。

まずは、前ページで紹介した戸田観音がある中村町の伝説をご紹介します。

○戸田観音のがらっぱ像（中村町）

―原文のまま―

戸田観音は中村町戸田にあり、この付近一帯には南北朝から戦国期にかけてのたくさんの石塔が残されている。そこにある堂宇内には木彫の大きな観音菩薩立像があり、土地の人々の信仰の対象になっている。その観音像の前にあまり大きくはないが奇怪な形の木彫がある。人間の顔に似ていて目をカッと開いて、歯をむき出し、全身鱗をつけた異様な河童の像である。

この堂の東方眼下に川内川が見わたされる。このあたり古くは入来院氏の支配地であった。長禄三年（一四五九）祁答院徳重の娘が侍女七人と八女の瀬（宮之城町）で舟遊びをしていて、舟が転覆し全員溺死して下流の戸田の崖下に八人の屍体が浮んだ。これはてっきり河童の仕業に違いない、今後二度とこのような悲劇がないようにと、ここに観音様を祀って娘の霊を慰め、河童像を供えたといわれる。この河童像は宮之城の仏師大磯作兵衛（寛保のころ）の作という。

次は、高城町のがらっぱ伝説の原文を、その舞台となった稚児ケ淵に行き、現地の方から聞いたお話とともに、紹介します。

稚児ケ淵のがらっぱ伝説（高城町）

―原文のまま―

高城町光明坊の後方約三〇〇メートルのあたりに「稚児ケ淵」という所がある。高城川である。高い石の断崖に臨み、深くよどんでいて何となく無気味な感じである。

高城の領主渋谷高城氏の稚児（身分高き武家の子をチゴといった）が、高城浄興寺別院有知水寺に学問修行に行っての帰りに従者六名とこの淵の所を通りかかったとき、朱塗りの盃が浮いていたので、従者にとって来るように云ったが、こわがって行こうとしない。稚児はオレが取ってくると、馬のまま淵にのり入れ盃をとろうとした途端に人馬もろとも沈んでしまった。これは河童の仕業に違いないと、父親は祭壇を設けて折伏した。すると河童が出て来て、一切を白状し、今後一切危害を加えず、子供は水から守りますと誓い、その趣を岩に刻んだと伝えられ、その後この淵を稚児ケ淵というようになった。

この伝説は、妹背城に住んでいた高城氏の子ども（稚児）が川に浮かぶきれいな盃を取ろうとすると、馬とともに川に沈んでしまったのを、がらっぱの仕業だと、高城氏が怒り、水神様を祭ってがらっぱが自分に従うようにし、「これからは水遊びをする子どもたちを傷つけません」と誓わせたというお話です。

この伝説にもあるように、がらっぱはいたずらをする悪い妖怪であり、皆さんにとってあまり良い印象ではないかもしれません。

しかし、〝水遊びをするときは、がらっぱに悪さをされるかもしれないから気を付けよう〟と子どもたちに知らしめるものとして、昔から語り継がれてきているものでもあったのではないでしょうか。

高来地区では、稚児ケ淵に実際に子どもを呼び、伝説を含めた歴史講座を行ったりして伝説を語り継いでいます。

高来地区コミュニティ協議会
内村（うちむら）　純一（じゅんいち）　会長

川内がらっぱ（せんでがらっぱ）

また、本市にとって、「がらっぱ」と言えばどうしても外せないのが、川内人の気質を表した「せんでがらっぱ」という言葉。

がらっぱのように足を引っ張るとかいうイメージで使われることもあるけど、もともとは、相撲好きで活発・躍動的ながらっぱのように、川内川を臨む自然の中で友達同士でたくましく鍛えあってほしいという思いと、好奇心が旺盛で、新しいことを次々に吸収するという意味を込めて、

1. 質実剛健（元気でたくましい人）

2. 創意進取（良いと思ったことは進んで取り入れ、工夫しようとする人）

という人物像を表す言葉でもありました。

それが、水中に引きずり込むがらっぱのイメージから、いつの間にか他人の足を引っ張る人の悪い気質をやゆする言葉として、使われるようになったんじゃないかな。

僕たちは、「せんでがらっぱ」の表すもともとのプラスの意味を心に留めながら質実剛健・創意進取の人物像を目指していきたいものです。

薩摩川内市にとってのがらっぱ

いろいろな伝説を調べて分かったのは、がらっぱというのは、人を水中に引きずり込む恐ろしい一面がある一方で、高江町八間川の伝説（川内風土記）では、がらっぱ同士が相撲を取り合ったり、湯島町の風呂好きのがらっぱの伝説（せんだい！ガラッパ伝説）では単純にいたずら好きな妖怪として愛嬌（あいきょう）たっぷりに書かれていたり、時には宮崎町の報恩（川内市文化財要覧）のように恩を感じた人間に恩返しをするような一面も。

また取材でも分かったように、河童伝説で恐ろしい一面が度々描かれるのは、川内人にとって切っても切れない縁のある川内川などの川で、我が子を思い、安全の面から子どもの川遊びの戒めに「がらっぱに引き込まれるから川で遊ぶのは注意しなさい」という教育の面があったんじゃないかと推測されます。

恐ろしくて、時には愛嬌もあるがらっぱ、これからも薩摩川内市に身近で、薩摩川内市を代表するキャラクターとして、みんなで愛していきたいと思います。

そして、川内川には、実際にがらっぱがいる。そう思いながら、毎日を過ごした方が、今よりちょっぴり楽しくなる。そんなことを考える一日となりました。

皆さんが知りたいことや紹介したいことなどがありましたら、情報をお寄せください。
問合先／本庁広報室広聴広報G（内線632）